

# 了義寺と杉の板戸絵



下山田の飛瀧山了義寺は、臨濟宗建長寺派の寺院です。当寺は寺に残る古文書の写本や、『新編相模国風土記稿』を総合すると貞治6（1367）年8月足柄地頭和田宗時が足柄の山端荘（今の大井町山田字芭蕉）にあつた真言宗無量義院を禅寺に改め、古先印元禪師（建長寺38世住職）を鎌倉長寿寺から招いて開山とした寺です。



地藏菩薩

現在の本堂は、天明6（1786）年、19世芝山禪師の時、下山田の富豪で、小田原藩の御用商人であつた曾根惣右衛門の寄進により、再建し、このとき建てた本堂は総檜づくりで、現在もなおその威容を示しています。また、本尊の地藏菩薩は、専門的な調査によると室町時代初期の優れた作品で、もともと建長寺に伝來したといふ伝えに見合つた像であるとの報告がなされています。



# 杉の板戸絵



町指定重要文化財 杉の板戸絵  
昭和 46 年 6 月 8 日指定

本堂にある杉の板戸の水墨画は、江戸後期の桜井雪保の作です。父の雪館は水戸藩出身、江戸に出て室町期の雪舟の画法を研究し、画塾を開き門人を多く集めた画家で、その跡継ぎが娘の雪保です。近年、水戸市立博物館で特別展が開催されるなど女流画家として注目されています。

儒学も修めた、芝山和尚の時代、江戸の儒学者の仲介で雪保を寺に招き、本堂板戸の作画を依頼したとされています。豪快さと纖細さを兼ね備えた板戸 24 面の絵は、寛政 6 (1794) 年、雪保 41 歳の代表作で、その中でも仏間の前の「龍」「虎竹」図は、大胆な構図と伸びやかな線で描かれた傑作です。また、小板戸にある「梅」図の枝振りなどは、禅寺の中興を祝う構図ともいわれています。



弁天社

了義寺境内の東には、弁天社があります。『新編相模國風土記稿』には、「了義寺弁天社の御神体は弘法大師が護摩の灰をもつて造りしものとい。背に手形あり、五本の指には天長 7 年 (830 年) 7 月 7 日江の島弁財天において秘密の護摩一萬座修行奉り、其の灰をもつて此の像を形作るものである。空海と記してある」とあります。江の島弁財天と関係が深く、願いが叶うとして昔から信仰されてきました。

# 弁天社